



右・庭から見た三井八郎右衛門邸
左・襖絵や天井画の和洋折衷の室内



仏間前の廊下にあるシャンデリア



堂々とした子宝湯



前川園男邸

特集

江戸東京たてももの園・多磨全生園 歴史と花々の散歩道



小金井公園内にある江戸東京たてももの園は平成5年、江戸東京博物館の分館として開園。文化的価値が高い歴史的建造物を移築し、復元・保存して展示する野外博物館だ。西、センター、東のゾーンに分かれ、現在29棟の建物がある。来年3月公開予定のデ・ラランデ邸が復元工事中で30棟目となる。多種の樹木や花々の中を歩きながら、建物が語りかける当時の暮らしを体感し、しばし非日常の世界に浸ることができる。

西ゾーン

山の手通りに並ぶ、「田園調布の家」「前川園男邸」「小出邸」の3棟の建物は、大正末期や戦前に建てられた住宅ながら、今なおモダンで清々しい。東京文化会館や国立国会図書館などを設計した有名な建築家、前川園男の自邸は左右対称、切妻屋根の和風造りで、吹き抜けの居間は一面ガラス窓、シンプルで開放的。戦時下の昭和17年、品川に建てられた住宅で、建築資材が不足し、窓のレールに木材を使うなどの工夫がされて

いる。「北側の雨戸は障子とガラス戸の間にあるでしょう。寒い時期にガラス戸を開けなくてすむというアイデアなんですよ。でも郵便受けの位置が玄関から遠くて、これは失敗したと言っていたそうですよ」とユーモアたっぷりに説明してくれるのはボランティアガイドの高橋弘也さん。この日は1時30分から個人向けに定時ガイドがあり、5名が参加していた。園内アナウンスで知らせてくれ、予約なしでOK。

西ゾーンで見逃せないのは「三井八郎右衛門邸」。昭和27年に建てられた港区西麻布の三井財閥の総領家、三井八郎右衛門高公邸を移築したもの。高価な品々を納めていた、明治7年建築の土蔵も併設して復元されている。内部の調度品や枯山水の庭を見るだけでも価値がある。ヤドリギをデザインしたルネ・ラリックのランプシェード、明治期スロバキアでつくられたという2階廊下のシャンデリアは第一国立銀行に飾られていた。花鳥風月の襖絵は四条円山派の画家の手による。庭のしだれ桜も美しいこの時期、



万徳旅館は平成4年まで営業していた



高橋是清邸



是清邸2階の二・二六事件の現場



ボランティアガイドの
高橋弘也さん



丸二商店、隣が花市生花店



大和屋本店(乾物屋)



江戸東京たてももの園でタイムスリップ...

ゆったりと男爵三井家の栄華を偲んでみるのもいい。

センターゾーン

ここには歴史の現場となった「高橋是清邸」がある。明治から昭和初期にかけて日本の政治を担い、総理大臣、6回の大蔵大臣を歴任し、「ダルマ蔵相」と親しまれた高橋是清。政治家以前には共立学校(現・開成高校)の校長を務め、正岡子規や海軍中將、秋山真之が教え子だったことは「坂の上の雲」でもおなじみだ。港区赤坂に明治35年に建てられた住まいの主屋部分を移築したもの。総梅普請で、洋間の床は寄木張り。2階の寝室が昭和11年の二・二六事件の現場。ここで早朝、青年将校達は銃弾を浴びせ、軍刀で斬りつけた。昨年3・11の地震でひびが入ったという床の間が、昔と今とをどこかつかないでいる気がした。

東ゾーン

黄色の都電7500形の展示場所から正面に銭湯の子宝湯が眺められる。両側は下町の商店が軒を連ね、まるで映画のセットに迷いこんだか、昭和にタイムスリップしたかのよう。実際、映画やテレビのロケによく使われている場所である。昨年9月に青梅で営業していた「万徳旅館」と港区白金台にあった乾物屋「大和屋本店」の復元が完成した。万徳旅館

は江戸末期から明治初期に建てられたと推定され、山岳信仰のお参りや越中宮山の薬売りの泊まり客で賑わっていたという。外観からは150年前の往時が偲ばれる。室内では60年前の営業の様子がかかる。江戸の旅館の面影をとどめる貴重な旅館。大和屋本店に陳列されている椎茸や卵、すめ、昆布などの乾物は本物そっくりのイミテーション。昭和3年建築、ノックの木造3階建てだ。

荒物屋の「丸二商店」、「花市生花店」、文具店の「武居三省堂」はどれも昭和初期に建てられ、平坦な前面がタイルや銅板で覆われ、装飾が施された看板建築。武居三省堂店内の壁一面の引き出しは子宝湯とともに、宮崎駿監督の「千と千尋の神隠し」のモデルとなった建物と言われる。「丸二商店(荒物屋)」の裏手は長屋の路地。今にも割烹着のおばちゃんが出て来そうな雰囲気。この下町通りには中ほどに店蔵型の休憩所、その上にはうどんな店もある。四季を通してイベントが行われ、貴重な文化遺産の施設としてだけでなく、家族揃って楽しめる場所でもある。

●観覧料 一般 400円/65歳以上
200円/大学生 320円/高校
生・都外の中学生 200円/都内
の中学生以下無料
●開園時間 4月～9月 9時30分
～17時30分 10月～3月 9時30分
～16時30分 毎週月曜休園(祝
日・振替休日の場合はその翌日)
☎042(388)3300(代表)



山吹舎 1部屋12畳半に多い時は8人で共同生活していた



上) 国立ハンセン病資料館
右) 館入り口の「母娘遷路像」
下) 広々とした展示室



望郷の丘 大正14年患者たちが
踏み固めて完成させた



国立ハンセン病資料館
春季企画展
「青年たちの『社会復帰』」
1950-1970
4・28(土)〜7・29(日)
無料

全生園の散歩道… 緑の中に埋もれた歴史を知る

東村山市にある国立療養所多磨全生園(ぜんしょうえん)は例年桜のシーズンになると、観桜会が催され数多くの花見客で賑わう。全生園の敷地面積は約35ヘクタール、東京ドーム7つつ分よりも広い。明治42年(1909)にハンセン病患者の隔離施設として開所されたが、現在では誰でも出入り自由、散策に訪れる人も絶えない。所沢街道の車の往来がうそのような、静謐で緑あふれる場所だ。

この緑なすクヌギやケヤキ、コナラなど約3万本に上る樹木は入所者の手によって植えられたもの。園外からの寄贈のほかに、入所者自身から5千円ずつ出し合って、サザンカやツバキを植える「一人一木」運動が行われた。故郷を思ってか北国や南国の木々も植えられている。昭和40年代頃から植樹されたこれらの樹木が大きく育ったのが全生園の森だ。「らい予防法」(平成8年廃止)による国の強制隔離政策で、生涯をこの園内で暮ら(した)す人々が大切に育て、思いを刻んだ樹木である。

隣接した「国立ハンセン病資料館」にはぜひ立ち寄ってみたい。平成5年に開館、吹き抜けのロビーに光射し、ゆったりとした空間が広がる。2階にある常設展示室は3つに分かれていて、ハンセン病をめぐる歴史や政策、療養所で

の患者の過酷な生活、そして生き抜いてきた証。これらの写真や映像、当時の生活用品など、全国の療養所から収集した資料とともに展示されている。

治療が開発され、ハンセン病は現在薬で治る病気だが、かつては不治の病、伝染病とされ、想像を絶する差別や偏見があった。誤った隔離政策と偏見によって苦難の人生を強いられた人々。殊に親と引き裂かれて入所した子どもたちの姿には胸がしめつけられる。そんな過酷な苦しみの中にも人々は生きる価値を見だし、病気と偏見とに立ち向かいながら生きてきた。事実を知ることでは人は理解できる。知る。この大切さをこの資料館は教えてくれる。

園内には昭和3年に患者の大工さんの手で建てられた「山吹舎」や昭和11年の「旧図書室(現在理・美容室)」など貴重な建物が遺っている。築山の「望郷の丘」は当時富士山や秩父の山々が見渡せ、この丘で入所者は帰られない故郷を偲んだという。

●国立ハンセン病資料館

東村山市青葉町4-1-13

入館無料 9時30分〜16時30分

(入館は16時まで)

月曜休館(祝日の時は次の日)

☎042(396)2909